

平成22年度 南海地震フォーラム



日 時 平成22年7月13日(火)
13:00~16:10
場 所 須崎市立市民文化会館
主 催 高知県立須崎高等学校
共 催 須崎市教育委員会

[フォーラムの内容]

- | | | | |
|---|-------------|--------------------------------------|-------------|
| 1 | 開会 | 高知県立須崎高等学校長挨拶
高知県立須崎高等学校生徒保健委員会挨拶 | 13:00~13:10 |
| 2 | 基調講演 | 「須崎校区で何が起ころうとしているのか？」 | 13:10~14:10 |
| 3 | 実践的な取組発表 | 「須崎市の自主防災組織及び漂流物対策」 | 14:10~14:50 |
| 4 | パネルディスカッション | 「南海地震に対し今取り組めること」 | 15:10~16:00 |
| 5 | 閉会 | 高知県立須崎高等学校生徒保健委員会メッセージ | 16:00~16:10 |

南海地震フォーラムの開催にあたって

高知県立須崎高等学校長 野町 均

このたび平成22年度南海地震フォーラムを開催する運びとなりました。まず、はじめに基調講演および実践発表をなさっていただきます高知大学教授岡村眞氏、須崎市総務課防災担当参事谷脇秀幸氏ならびに共催の須崎市教育委員会に感謝申し上げます。

この催しの企画運営にあたっては学校保健委員会や放送部等たくさんの生徒諸君が携わっています。その意味で得がたい教育機会であると考えています。

須崎高校としては初めての試みであります。今回の内容を踏まえ今後も持続して追求しなければならない課題であると位置づけています。地域に育てられてきた学校としてすこしでも地域に貢献したいとの思いを新たにするとともに皆様のご指導ご支援をお願い申し上げます。

1 基調講演 「須崎校区で何が起ころうとしているのか？」 —揺れが始まるまでに何をしておくべきか—

高知大学理学部教授 岡村 眞

須崎校区はたびたび高知県を襲ってきた南海地震で、津波の高さが10m近くにもなり、そのたびに多くの犠牲者を出してきた。今世紀前半にも予想される次の南海地震は、過去最大級となる可能性も指摘され、命を守る具体的準備に取りかかる時期を迎えている。須崎校区の沿岸は地盤が軟弱な地域も多く、住民の多くがそのような低地に住んでいる。そこでは、立っていることさえ困難な震度6弱以上のゆれが100秒以上も続く。強いゆれから15分後には高さ8mを越える津波が多くの木造家屋を流してきた。このような歴史的事実を我々は学んできた。一方で、最近の家は震度7のゆれにも耐えることが出来、家具の固定が完全なら安全に外に避難出来る。津波は8時間でおさまるので、何も持たず探さず、15m以上の高所へ避難しよう。防災の第一歩は、最初のゆれで生死が決まってしまうことを理解することである。そのとき、一人一人が的確な判断ができるよう、常に学習と訓練をくり返すことが重要である。私たちは安全に生き延びて、次世代に命をつないでいく責務がある。宿命は変えられる。

2 実践的な発表 「須崎市の自主防災組織及び漂流物対策」

須崎市総務課防災担当参事 谷脇 秀幸

須崎市は、その地形的な特性から過去に繰り返し地震津波により、多くの人命と財産が奪われ、記録に残るだけでも9回の地震津波に襲われ、そのたびに甚大な被害を受けてきた。こうしたことから、地震を止めることはできないが、須崎市は津波による犠牲者ゼロを目指しこれまで取り組んできた。その中で津波による漂流物対策が課題となっていることから、平成18年に須崎市防災会議に須崎市津波防災漂流物対策専門委員会を設置し、対応策を検討してきた。

今回は、須崎市の過去の津波被害からどういった対策が必要であるか。須崎市がすすめてきた漂流物対策と、自主防災組織の取り組みや皆さんが安全に避難するための対策について話をさせていただくことになった。また、専門委員会から提言のあった避難計画の策定については、災害弱者である要援護者に対する避難支援計画を策定し地域コミュニティや、自主防災組織の普段からの取り組みの重要性について話をさせていただくことになった。

3 パネルディスカッション 「南海地震に対し今取り組めること」

パネルディスカッションでは、高校生の立場から高知県立須崎高等学校（以下須崎高校）「命を守るために」の取組を発表します。そして、高校生の立場、地震に関する専門的な立場、また行政の立場からそれぞれ「南海地震に対し今取り組めること」についてディスカッションをします。

[パネラー] 高知大学理学部教授 岡村 眞、須崎市総務課防災担当参事 谷脇 秀幸
 高知県立須崎高等学校生徒保健委員会 吉岡 美貴、芝 大樹
 [コーディネーター] 高知県立須崎高等学校副校長 山川 陽司

4 高知県立須崎高等学校生徒保健委員会の取組

高知県立須崎高等学校生徒保健委員会委員長 吉岡 美貴
 副委員長 芝 大樹
 指導教員：保健環境部長 中平 定人
 養護教諭 保川 治美

須崎高校生徒保健委員会は各学年各ホームから1名ずつを選出し、合計12名で構成されている。毎週火曜日を定例保健委員会としている。本年度の取組テーマを「命を守るために～南海地震に対して今から取り組めること～」とし、「1日の大半を過ごす学校でも南海地震が発生したら・・・」ということ想定し、活動を行うことに決めた。まず、校内施設・設備の安全点検を行ない、その結果をまとめた。今後は校内の危険箇所を見つけ、修繕や改善に向けてアプローチをしていく。

また、テーマにもあるように、命を守るという視点から、救急法講習会では保健委員が運営の一端を担い、事前に保健委員自身が救急法を学び、その手技を披露して友人たちへのアドバイザーとなった。

さらに、高知大学の岡村 眞先生の指導のもとで南海地震の講話や意見交換、校内の安全点検や避難経路の確認を行い、活動をより具体的、実際的なものに行っている。

5 南海地震フォーラムポスターの作成

高知県立須崎高等学校生徒指導部長・商業科長 井上 稔

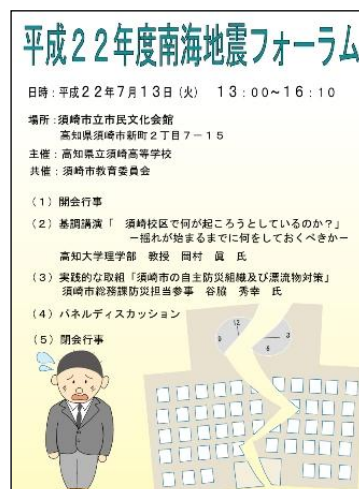
商業系列情報コース3年生の生徒が、授業の中でCGソフトウェアであるイラストレーターを使った実習に取り組んでいる。今回の「南海地震フォーラム」は須崎高校が主催であり、生徒一人ひとりが何らかの形で協力しようという思いからポスターの作製に取り組んだ。

作製にあたっては、須崎高校のマスコットキャラクターとして「スサキ スキサ」君を登場させること、各自の南海地震のイメージを背景に取り入れることとし、生徒の豊かな発想を基に教員がアドバイスをし、各自のポスターを作製した。

生徒自身がポスターの構成やイメージ創りにかける時間が限られており、短時間での作製には苦労したが、卒業後の社会へ出たときのトレーニングになった。作製したそれぞれのポスターは個性的で、十分評価できるものになった。次に生徒の作品を示した。



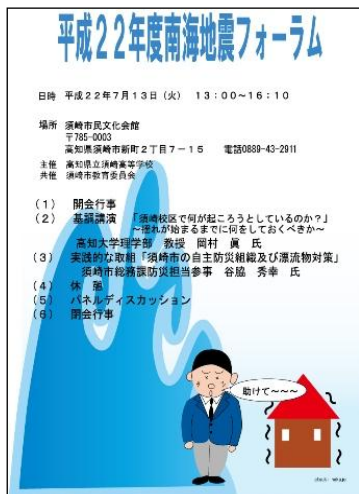
3-2H 濱田 仁



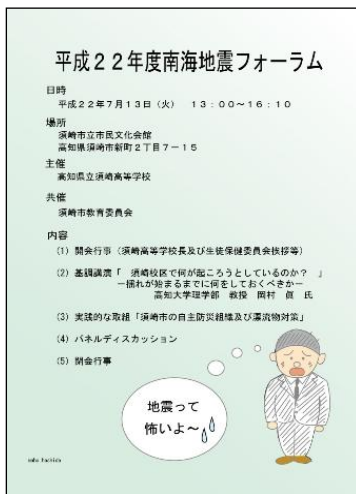
3-2H 吉岡 美貴



3-2H 平田 健悟



3-2H 中城 敦紀



3-2H 橋田 真歩



3-2H 又川 稜也

【コラム】 チリ地震による津波

平成22年2月27日(土)午後3時34分頃(日本時間)、南米チリでM8.8の地震が発生した。気象庁はこの地震による津波の被害を警戒し、翌2月28日(日)午前9時33分に太平洋側を中心に大津波警報、津波警報を発令した。2月28日(日)、須崎高校は日曜日ではあったが卒業式の予行練習を行うことになっていた。チリ地震による津波を心配しながらメディア等からの情報を常に収集し、いざとなったら校舎3階以上に避難することを確認して予行練習実施を決めた。そして、午後2時ごろ北海道・東北地方に津波の第1波が到達し、津波情報が次々に入ってくるたびに、予行練習の進行と津波への対応に緊張しっぱなしの1日となった。結果として無事予行練習は終了したが、須崎湾では1m20cmの津波を観測し、それは日本の中で最も高い記録の一つだったことを知った。職員の声には、具体的な危機管理、地震・津波に関する研究・研修、情報の共有などの必要性を感じる緊張感のある声があった。

6 高知県立須崎高等学校からのメッセージ

高知県立須崎高等学校生徒保健委員会

私たちは、今世紀前半にも来るであろう南海地震に立ち向かわなくてははいけません。地震やその他の自然災害を未然に防ぐという事はなかなか難しいことです。防災も大切ですが、今は減災も考えるべきです。災害が発生した時にいかに被害を最小限に食い止めるかも重要といわれています。そのためには、確かな知識と的確な判断、そして迅速な行動ができるように日ごろから南海地震に関する講習会や災害訓練に参加し、常に防災・減災への意識を持ち続けることや災害発生時に使用する備品の用意など具体的な対応策の実施が必要です。

何度も来校していただいている岡村真先生から『必ず生き延びるんだよ!』という命のメッセージをいただきました。この言葉を強く受け止めて、大切な一人ひとりの命が守れるように、継続的な取り組みを行っていきます。

7 終わりに

今回の南海地震フォーラムは高知県教育委員会事務局(以下県教委)高等学校課の事業(21ハイスクールプラン推進事業)で採択していただき、初めて開催することができました。開催にあたりましては、須崎市教育委員会に共催をしていただいたこと、須崎市総務課防災担当、中土佐町及び津野町の行政や教育委員会、県教委スポーツ健康教育課、高知県教育センター教科研究センター、そしてその他にも多くの方々にご指導やご協力をいただきました。この書面を借りてお礼申し上げます。